# 「中国报」（中国リポート　第十七号）

## おすすめ書籍（番外編）

～新型コロナ禍の出張不可能状態のため番外編：おすすめの中国関連書籍情報～

### 新疆ウイグル自治区　中国共産党支配の 70 年
### 熊倉潤著　中公新書

新疆ウイグル自治区、我々が見慣れたメルカトル図法で描かれた日本が真ん中に位置する世界地図で見ると、北京からはかなりの距離があるように感じる。そのため、最果て（？）のイメージを抱きがちだが、実際には、航空機で 4 時間ほどなので、東京-北京と所要時間は変わらない。中国の地図だと、四川省の成都あたりが真ん中なので、省都ウルムチも首都から近い。

本書は、この中国全体の 6 分の 1 ほどの面積を占め、人口約 2,500 万人の新疆ウイグル自治区の歴史と未来に関して書かれたものだ。「新疆という地域の歴史を一冊の通史として扱う、まとまった日本語の書籍」がほぼ存在しないため、著者はその点を意図して書いたという。

「新疆」には、ウイグル人の他にもカザフ人、モンゴル人、クルグズ（キルギス）人、タジク人、ウズベク人、タタール人という民族が共存してきたが、19 世紀までにこの地へ移住してきた漢人（漢民族、漢族）は、多くなかった。清朝の支配下で新しい疆域・領域という意味を持つ新疆と名付けられたが、歴史的には、テュルク系ムスリムが多く住む「トルキスタン」の一部とみなされ、「東トルキスタン」と呼ばれてきた。1933 年に誕生し、短命で終わった「東トルキスタン・イスラーム共和国」だが、歴史的には紀元前二世紀の前漢の時代に漢人王朝が進出を始め、その後の匈奴との紛争の歴史が物語るように、この地に住む民族にとっては、いわゆる国家としてのまとまりがなかったとはいえ、漢人以外の人々の住む土地であった。宗教的には仏教が駆逐され、十世紀以降イスラム化が進み、十六世紀にイスラム化が完了した。

2021 年に中国政府が出した「新疆各民族平等権利の保障」白書によると、紀元前 60 年に西域都護府が設置されたときをもって、正式に新疆が中国の版図に組み入れられたとしている。

本書には、「新疆生産建設兵団」の成り立ち、「親戚制度」「両面人」の意味するもの、2016 年に施行された「反テロリズム法」の成立経緯など、如何に中国共産党が西域へ侵出してきたかが、中立的な立場で書かれている。

ちなみに、習主席の父君習仲勲は、西北局の第二書紀として新疆を担当し、活躍したが、新疆問題に関しては、穏健路線を主導する「右派」だった為、習近平体制の現在の中国では、事績自体が議論の俎上に登らなくなっているとのことだ。

新疆ウイグル問題に関する理解を深めるには有益な一冊だと思う。

（2022/09 森山博之）

---

本リポートに関する問い合わせ先：https://arc.asahi-kasei.co.jp/contact/